

博物館資料情報の協働管理に向けて

米国南西部先住民ズニによる”Creating Collaborative Catalog”プロジェクト

伊藤敦規 (日本学術振興会特別研究員 PD (国立民族学博物館))

本発表の目的は、現代アメリカ南西部先住民ズニ (Zuni) による、民族学博物館収蔵資料の管理情報共有に向けた「協働カタログ制作プロジェクト」の概要報告にある。

米国南西部のニューメキシコ州中西部には、約8,000人が暮らす先住民ズニの保留地がある。文化人類学者であれば、「ズニ」という言葉から、ルース・ベネディクト、『文化の型』、アポロ型、といった語句を連続的に思い浮かべる方が多いだろう。あるいは、トルコ石と珊瑚と銀を主要な素材とする宝飾品を思い浮かべる方もいるだろう。一方で、1990年代にスミソニアン博物館とNAGPRA (米国先住民墓地保護・返還法) を根拠とする交渉を行い「戦争神」像やキリスト教会の聖者像を返還させた、政治力を行使する現代北米先住民コミュニティとしてのズニを思い浮かべる方はそれほど多くはないだろう。

当時、スミソニアンとの交渉を担当したのはズニ政府のある部局であったが、現在では米国内外の民族学博物館等が収蔵するズニ関連資料の交渉窓口はズニ博物館 (A:shiwí A:wán Museum and Heritage Center) が担っている。1992年、ズニ博物館はズニ保留地内に創設し、これまでにコミュニティへのアウトリーチを主とするいくつかのプロジェクトを実施してきた。現在、ズニ博物館が精力的に行っているのが『協働カタログ制作プロジェクト (“Creating Collaborative Catalog”)』である。本プロジェクトの目的は、一部の農耕技術やアート制作の技術といった、失われつつある彼らの伝統的知識を、民族学博物館が収蔵する資料を用いて若い世代に伝えていく機会を確保することである。具体的な作業として、以下の6点がある。主に欧米諸国の博物館が保存・管理するズニ関連収蔵資料の管理情報のデータベースを共有する。収蔵資料の画像をコミュニティの成員に見せ、様々なコメントを得る。当該博物館にて資料の熟覧作業を実施する。民族学博物館が管理するデータベースにズニの様々な人々の言葉を上書きしていく。特定の収蔵資料に関して、適切な保存方法や展示方法を提示する。上書きしたデータベースを用いて伝統の再興や展開をサポートする。

これまでにズニ博物館は、英国のケンブリッジ博物館、米国のハーバード大学ピーボディー博物館、北アリゾナ博物館、マックスウェル博物館、SARなどと、収蔵品の情報共有に関する提携を結んできた。さらにズニ博物館は日本国内の博物館にも注目している。これまでに2009年には2度、大阪吹田市の国立民族学博物館に来館し、みんぱくが収蔵する資料熟覧を実施した。みんぱくの「標準資料目録データベース」(約24万点)にて「ズニ」や「Zuni」を検索すると、木彫・石彫人形、土器、装身具等、約30点が確認できる。なお、みんぱくにおいては、上記したまでの作業を発表者との共同調査という形ですでに実施しており、アイヌ民族による収蔵資料のケアのやり方 (カムイノミ) についても興味を抱いている。

強調しておきたいのは、この「協働カタログ制作プロジェクト」が、モノ自体と所有権の移動を伴う返還問題を念頭に置いているわけではない、ということである。伝統的知識をソース・コミュニティに還元すること、そして先住民と民族学博物館の資料の協働管理が主たる目的なのだ。ここでいう伝統的知識とは、美術工芸品などの動産文化財、聖地・遺跡など不動産文化財、写真・映像等民族誌的記録、生業・技術・医学的知識や生物多様性関連知識、フォークロアの表現、言語等を指す。ズニではそれら伝統的知識の共有の範囲や伝達方法に、多層性と一定のルールがみられる。例えば、非ズニでもアクセス可能なもの、非ズニには公開しないもの、宗教結社の加入者やクラン成員にのみ知識の共有が認められているもの、結社やクランの特定の役職に就く人物しか管理しえないもの等である。

ズニ博物館は開館までの30年間を、モノや情報を収集・管理・公開する博物館の役割をめぐる議論に費やしてきた。現ズニ博物館長も情報と知識の共有のあり方に関して非常に慎重な姿勢をとりながら、民族学博物館等との新たな関係の構築に向けた活動を精力的に展開している。

【 民族学博物館、アメリカ先住民、ズニ、協働、情報と知識の管理 】